

浄土

正月号



法然上人鑽仰会

昭和十一年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省 (特別換承郵証第三五二号)
昭和四十年十二月二十五日 印刷 昭和四十一年一月一日 発行

第三十二卷

第一号

年 新 賀 謹

総本山 知恩院

門主 岸 信 宏

京都市東山区林下町
電話(56)〇〇三五〽三八

浄土宗宗務庁

大本山 増上寺

法主 椎尾 弁 匡
執事長 里見 達雄

大本山 光明寺

法主 大野 法道
執事長 丸地 弁 信

総本山 知恩院

執事長 鵜飼隆玄

京都市東山区林下町
電話(56)〇〇三五〽三八

京都 東山

総本山 知恩院

法務部長 二本松聖順
教務部長 山口 真誠
信徒部長 谷地 益雄
庶務部長 梶原 重道
財務部長 本田 正義
執事 赤木 定順
執事 藤田 説量
執事 野々村 学念

大本山 善光寺大本願

法主 一条 智光
鷹司 誓玉
執事 早川 利雄

浄土宗宗務支所

支所長 新谷寛応

鎌倉大仏殿 高德院

住職 佐藤密雄

東京文京区小石川三の一四の六

伝通院

東京目黒区中目黒三ノ一〇六七

祐天寺住職 巖谷勝雄

華頂学園長

水野隆樹

京都市東山区知恩院山内

念仏の時、悪業のおもはるゝ事は、
一切の凡夫のくせ也。
さりながらも往生の心ざしありて念仏せば、
ゆめ／＼さはりとはなるべからず。

法然上人御法語



— 目 次 —

表紙「陽」松濤達文画

随想	中島真孝・須藤隆仙・山下寿郎	(2)
現代と仏教	中村 元	(4)
— . — . — . — . —		
浄土問答 攝取不捨	藤井 実応	(8)
童話「醜太子」物語	北村 謙順	(12)
仏教人生訓 独断のいましめ	宝田 正道	(16)
浄土のこよみ	大橋 俊雄	(18)
— . — . — . — . —		
三十周年記念祝賀の集い		(28)
高僧の一面 風邪に弱かった法然上人	鈴木 成元	(22)
お経の話 衆生と共に進む	村瀬 秀雄	(24)
ご法語をいただく		(7)
カウンセリングとはなにか		(11)
霊跡訪問 誕生寺		(18)
支部便り		(33)
連続絵話		
みんなの法然さま・ひじりの誕生	高橋 良和	(30)

釈尊の教え

中島 真孝

(前ハワイ開教総監)

釈尊は印度にお生れになり、印度で教を創められ、印度で昔はあれほど盛んに行われしました。その釈尊の教え、仏教が、今日では印度で行われていないのは不思議である。私は永い間この疑問を持って居りました。

それでこの度印度を旅行して、遇った幾人かの今の印度の人々にこのことを、如何に考えて居られるかと質問しました。そして大体次のような答を得ました。

「たしかに釈尊は偉大な立派な人であり、その教は尊い、今日でも釈尊の教えを実現することを、印度の国是として、私達は努力して居る。しから私達はヒンズウ教を信じて居る。釈尊は其当時の印度の弊風を矯正しようとして、大に努力した偉大なる社会改良家として私達は、今も大に尊敬して、其教えは実に尊い教えであると考えて

念仏を申すことによって、私達の心は和らぎ、やがては生死を離れることも出来るのだと堅く信じて念仏を申すことが最も大切であると存じます。

無媒随録

須藤 隆仙

鎌倉に住むという若夫婦が、久方ぶりに郷里北海道へ行ったというので、老父母を伴って四人で寺詣りにこられた。

若奥さんがなかなかサバサバした方で、鎌倉の寺と北海道の寺とを比較して話してくれ、おもしろい一時であった。

「お料理を食べさせる寺もあるので、小人数で行ったのでは相手にしてくれませんか」

ということ、いくらか憤慨しているようでもあった。

「光明寺さんはほんとうに古い感じですよ。

でも本山としては貧弱ですね」

などズバズバいうものだから、私は返事に窮

町会で各戸から古新聞などの廃品を集めて、その資金で有意義な仕事をしようという事になったのです。

それを町会長さん自づからリヤカーを引いて集めてあるのですからね。

それはえらいことですよ。私たちもとても尊敬しておりますし、町でもたいへん評判がいいのです」

屈託なく話すこの女性の言葉に、私の胸中はいくどか変動した。

そしてそれがホッとした大安堵におわたとたん、改めて佐藤先生に対する心服の情が泉のごとくにわいてきた。

自分と同じ宗派の人のよい話をきくと、心の底からうれしいものである。

反対に悪い話をきくと、わがごとこのごとく悲しいことである。

私はたまたま仏縁とでもいうのであろうか、浄土宗に出家したのだが、もし日蓮宗に出家しておればその宗派人について、あるいは禅宗に出家しておればその宗派人について、やはり同じ感情をいだくのであろう。

居る。」

○

布哇に居る第二世、第三世の人々は次のようなことをよく申します。

真宗のお寺に行くとよく、「親鸞上人は云々と申されました」と云う。浄土宗のお寺に行くと「法然上人は斯々であった」と云う。禅宗の寺では「禅は、……禅は……」と云う。そして真言宗の寺に行くと「大師様大師様」と云う。しかし私達は「仏教が何であるか」「お釈迦様の教えはどんな教えであるか」を知りたいのです。キリスト教の教会に行くとイエス、キリスト一点張りであるが、その方が私達には解り易くてよい。

○

私は印度で、印度の人々は釈尊の教を一の宗派位に考えて居るのではないかと思ひました。布哇で布哇の人々は生活の指針を求めて居るのであって「宗派の伝道はご免だ」と云うて居るように聞こえました。

○

することもしばしばで、ただしげしげとこの奥さんの顔をみるだけであつた。

と、

「大仏さんのお寺さんは」

と佐藤密雄先生の高徳院の話がでてきた。

いかなる評定かと胸がドキドキした。

「そこのお寺のご住職さんはリヤカーを引いて雑品を集めてあるいているのですよ」

という話には私は啞然とした。

「立派な学者さんで、学位ももっており、なんだかお寺さんの大学の学長さんもつめておられるんですって。お寺は観光客がたいへん押し寄せて、大仏さんのお寺さんはお金を見るのがあきたでしようという噂があるくらいです。そういう恵まれたお寺の住職さんが自分でリヤカーを引いて雑品を集めてあるいているのですよ」

とうとうと話を進めるのだが、私には意表をつかれた一時が、とてもとても長く感じられる。

「それがね、大仏さんのお寺さんのご住職さんが私たちの町会長さんなんです。それで

不思議なようである、それは少しも不思議ではないのであろうし、そんなことではる鎌倉の芳香に感激したのも、ごく自然な中の一つのできごとであつた。

白か黒か

山下 寿郎

(工学博士)

すべて、ものの判断を白か黒かに割り切りたがるということは、極端な言い方をすれば、そのかみの人探湯(クガタチ)の精神の発露だとも云えないことはない。

それ故、そのような態度に出る者は、決して文化的に進歩した人間だなどうぬぼれる資格は無いといえる。

白と黒との間には、幾段もの薄墨色があつて、これを活用した水墨画は、素晴らしい効果を現実に見せてくれ、現に国宝として珍重される名画さえあることを思うと、白か黒かということも、なかなか興味のある問題を提示してくれるのである。

随 想

現代と仏教



中村 元

(東京大学教授・文博)

戦後の教育界或いは思想界を見ると、最も顕著な現象は、精神的な空虚ということである。日本が精神的な寄りどころを失なったため、なる程経済面ではすばらしい復興がなされ、国際的地位も序々に回復しつつあるが、しかし思想面、精神面は、しっかりとした寄りどころを持っていないとは言えない。そのため国際上に於ても、何か日本の発言が軽く見られるということがあるのではないであろうか。

教育面においても、戦前は教育勅語があり、公私立の学校共教育の基本方針があった。それが又、道德の寄りどころとなっていた。ところが、敗戦と共にその權威が崩れ落ち、それにかわって、アメリカが占領すると共に、デモクラシーということを持って来た。これはアメリカ本国でのものと異なる

り、当時の占領軍の指導的立場にあった人々によって行ないたいことを、我々に押しつけた向きがあった。ところでその人々が去ると、アメリカの方針も変り、そのためアメリカの政策に対する信頼が失なわれてしまい、ヨーロッパ、或いは共産主義諸国から続々と思想が入って来た。それを知識人といわれる人々は、ただそれらを紹介し、翻訳し、叙述するだけに終り、又別の思想が入って来ると、それが紹介される。風が吹いて木葉が散る様に、ただ新しい思想が入って来ては、人々に何か言葉をかけて、又去っていくといった具合であった。こうした時、宗教はどうであったか。これを他の国の場合と比べてみると非常な違いがある。ヨーロッパについてみると、ヨーロッパには宗教の伝統というものが確立して

いる。従がって、あえて道德教育とかいうものを問題にしないくともよいのである。しかしたとえば日本の国立大学では宗教にふれることを、タブーにしている傾向がある。ヨーロッパの国立大学では、もともと神学校から出発したものであるから、宗教教育が中心になっている。神学というものが、非常な権威をもっている。全大学が国立

であるドイツでは学部を数える場合最初にキリスト神学があり、次に哲学科となっているといった具合である。ところが同じ国立大学でも日本ではどうか。最初、東京大学は官僚と医者を養成する学校だったといわれているほどである。なる程学部を並べる場合、工学部や医学部が最初に来て、特に重じられており、人文の学問等はどこにあるのか分らない程である。いわんや私共の印度哲学仏教学などにおいてはいうに及ばない。これは一つの例である。

現在、日本は、いろいろな面で進歩しているにもかかわらず、精神的な確信を失なっているのではなからうか。教育に於て中心となるべき宗教が、教育の外におかれている。教育において宗教を論ずるのはタブーとされている。この頃、道



博士中村の講演中

徳教育ということがさかんにいわれている。それも宗教を別にして扱う向きがある。そうしたことは、結局、単なる巧利主義になってしまおうと考えられる。眼に見えない世界にまなこを開き、そこから何かを導びき出してくるということに、欠けているのではないであろうか。人類の過去の偉大な思想

体系の中から宗教を除いて、果して何が残るであろうか。今の日本の教育指導者は、非常に悩んでいるのであろう。宗教の伝統を生かすということの必要性を感じている人は、随分多いと考える。

宗教の長い歴史の間には、いろいろのものがまつわりついてきた。しかし、そのまつわりついたものは宗教の本質ではない。それを取りさった奥にあるものが、普遍的な理法である。仏教でいうダハルマであ

る。ダハルマは、何も仏教に限られたものではなく、他に宗教を奉ずる人といえども実行すべきものなのである。なる程、その通りであると人々が納得する様な普遍的な理法にまで人々を導びいて行き、そこから一つのものを打ち出すことが必要ではないだろうか。その一例として、原始仏教聖典を見てみたい。シーガーラの教えをみると、シーガーラという

長者の子に釈尊が説れたところがある。これは世俗人のための道徳を説いたものとして、南方仏教では有名であるが、今我々が読んでも、なる程その通りであると思われる。もちろん二千五百年前と今とでは社会情勢も違い、把握しにくいがある。その場合にたつて考えれば、おのずと理解できるものがある。そしてその精神を現代に生かすことが充分できるものではないかと考える。そういうことになる、あまり宗教的な場という非難を受けることなしに、実際問題として宗教的な指導が公立学校等でも行なえると思うのである。

そこで私は三つの点を、特に注意したい。第一に教学の現在の体験をはかっていたきたいということである。これは何も、偉大な教理を生み出すということではなく、一人一人が、自分のおかれている立場に即して、自分の人生観を確立し、自分自身の思想を持つということである。結果的には、考え方が相似たものとなったとしても、それぞれに於て、自己の問題として考えてもらいたい。過去の偉大な教学体系も、それぞれ社会的・歴史的基盤の上に成立したものであるから、現代にそのまま生かされないことがある。それをその場面にあった様に、仏教の精神を生かしていただきたいと思う。

第二に、そうして出てくるものは、一応過去の教学或いは

宗派的な教学とは別な、新たな次元に於てある意味で、超宗派なものが出てくると思われる。それは全てが一緒になつて消えてしまうということではなく、互いに理解を図るところから、力強い生きたものが出てくるということなのである。

第三に、新しい構造原理となる様な思想は、新しい世界に於て指導性をもつものでなければならぬということである。大きい言い方をするならば、世界的指導性をもつものでなくてはならないといふことである。今日の文明は、孤立したものではなく、外からの影響を受けている。我々の構造原理となる思想は、広く世界的指導性をもつものでなくてはならない。狭く限つていふならば、日本国内に於て、新たに人々を導びき得る様なものでなければならぬ。そのためには、いろいろの問題があると思う。現になされている仏教教団の活動を、もっとさかんにするとか、或いは表現をもっと分りやすくして一般の人々でも近づけるものにするとか、いろいろモダンな考えを取り入れるということも、可能であると思われる。

この様に現代の場面に於て成し得ることは多くあると思う。この点に留意していただき、新しい日本の仏教を確立していただきたいと思う。(大正大学に於ける講演要旨)

二 法語をいただく

念々にすてざれとおしゆる事は、人のほかにしたがりてすすむる事なれば、わが身にとりて心のよび、身のはげまん程は、心にはからはせ給ふべし。又念仏の時、悪業のおもはるる事は、一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念仏せばゆめゆめさはりとはなるべからず。

(十二箇条問答)

お念仏を一心に称えているというのに、心の中では全く別のことがわいてきます。それは腹のたつことであつたり、貪る心であつたりします。お念仏を称えれば、阿弥陀さまのお力によって煩惱は消え、無智は智者と同じことになれるというのに、こうした自分はどこまで罪深い者なのかと、あきれるばかりであります。お念仏は行往座臥に称えようとしても、とてもできないのであります。こんなことでは往生できないに相異ありません。

このような悩みを法然上人に訴えた人がありました。その人に対する上人の御返事が、

このご法語であります。

お念仏を念々に相続して絶え間なく称えなさいということは、人によって様々であることは致し方ありません。貴方にできないことを強いたとしても、それは無理であります。貴方のできる範囲の内でお念仏を称えればそれでよろしいことです。

またお念仏を称えていながら、全く別なこと、怒りや貪りや愚かさの心がわいてくるとは凡夫の習性であつて、これまた止むを得ないことであります。しかしながら往生を願う心ざしがあつてのお念仏であれば、阿弥陀さまは決してお見捨てになりません。

更に法然上人は言葉をついで、次のように教えられました。

阿弥陀さまと凡夫とは、たとえば親と子との関係にあります。親は子供の成績が悪いからのいつて勉強させずに放っておくでしようか。親は子供がいうことを聞かずに遊んばかりいるからといって学校を止めさせるでしようか。凡夫は常に怒ったり貪ったりする性質を持っています。従つて凡夫はお念仏を称えていても煩惱がおきてくるのです。親が

子供を捨てないと同様に、阿弥陀さまは凡夫をすてることはありません。お念仏を称えれば必ず往生させて下さいます。

実はこのところが難しい点であります。凡夫は煩惱がつきものだからといって、少しの反省も自覚もなく、煩惱のままに身をゆだねたとすると仏さまのみ心に反します。またお念仏を称えれば、阿弥陀さまのみ光に浴し、み光に浴せばすべての罪が消えるといつても凡夫が聖者になれるものでありません。ほんとはこうした矛盾は理くつというものであります。この矛盾が矛盾でなくなり一つものとなるのが信仰であります。

学校では六十点以上とらない者は落第させます。同じ試験でも入学試験の場合には、容易なことでは六十点がとれないように故意に難しい問題を出します。しかし普通の試験では、普通に勉強していれば必ず及第できるように考えられた問題を出します。学校の先生たちは、子供が遊ぶことが好きで勉強が嫌なことをよく知っていますし、平常から少なくとも及第できるだけの点がとれるように苦心しています。

攝取不捨

藤井実応

A「私はある時、御説教を聞きました時、念仏申すものは、阿弥陀さまは念仏者を光明に攝取^{けきと}取って捨てたまわぬ——攝取不捨である」と承って、それから念仏申しつつ『攝取不捨、攝取不捨』とよろこんでおります、あさましい心が起きたり、心配なことがあったり、さびしくなったりする時も南無阿弥陀仏と称えては、このような者も攝取不捨であるところばせて頂いております」

B「それは尊いことですね、攝取不捨！　ほんとうに有難いことですね、信を求めている者にとっては、御法語の一句が光のように輝き、生命力となって、いつも生々と私を生かして下さるものです。元祖法然上人が、善導大師の観經の疏

の御文の『一心専念弥陀名号……順彼仏願故』の文を御覽なされて、その文が光となり上人のたましいをゆりうごかし、それから上人は一向専修（お念仏の一行を専ら修める）身となられたと伝えられています、上人御述懐にも「順彼仏願故（阿弥陀仏の本願に順^{したが}う故、往生せしめ下さる意）の文ふかく神^{たましい}にそみ、心にとどめたるなり」とあります。

ずいぶん前のことですが、大正十年に私は増上寺で加行^{けぎょう}をいたしました、ここにいう加行と申しますのは、浄土宗で住職になるまでには必ず一度、本山にこもって行を修めねばならぬことになっているものです、その加行の最後の日には深夜ローソクの光の中で莊嚴な伝法の儀式が行なわれます。山

下現有大僧正から伝法を頂きました。その儀式の最後の時に『私はあなた方を化導する力のあるものではありません、ただ法然上人さまのみ教をお取次させて頂いたにすぎません、あなた方は自ら念仏を申し、他さまにも御念仏をすすめ下さる菩薩方であられますから最後に拝ましてもらいます』とおっしゃって、十念をなさいました。私は余りの有難さに、前につつぶしてしまい、お念仏の声も出なかったほど感激をうけました。『あなた方は菩薩であるから拝ましてもらいます』とのお言葉は耳の底に残って、四十数年後の今日なお生々と私をはげまして下さいます。もっと拝むことのできる人間にならせて頂き共に念仏したいと念うているのです。

この現有大僧正のお話を六月十三日（昭和四十年）京都の専故院で、一日別時のときお話いたしました。話が終わった後、御住職小野寿栄老尼（八十才）は、『私も現有大僧正から拝んで頂いたことがあるのです。専故院はもと七本松にあった転法輪寺（現有大僧正の隠居地とせられていたお寺で、現在は竜安寺町に移転改築されている）の元の本堂を移したものであります、私が住職して間もない頃——その時、知恩院へ御礼御挨拶に参りますと、現有大僧正は『関通上人ゆかりの本堂を生かして下され有りがとうございます。どうぞ一人でもお念仏者のできますようにお願い申します』と拝んで

申されたので私は泣いてしまいました』と涙を流しつつお話下さいました、寿栄尼御住職以来五十年になるそうで、若い頃うけたその感激は、今なを涙を流さしめ『一人でも御念仏者ができますように』の念願となつて、数十年間毎月念仏会が開かれ念仏が勤まれています。

九月十七日（二十四号台風の日）私はまた専故院へお話に参りましたが、老尼から次のようなよいお話を聞きました。『仏教会の為に大に尽力下さった故山口玄洞居士らの御援けで、この院の毎月の別時念仏会も開くことができたのですが、居士はかつて道を求めて毎朝某寺のお説教を聞きにゆかれたのですが、まだどうにもおちつけぬものがありました。毎朝歩いてその寺へ参られるのですが、その途中、ある家の前を通ると毎朝必ず木魚で念仏の声が聞えてくるのです。熱心な念仏者であるにちがいないと、或る日思いきってその人を訪ねました。果して熱心な念仏者でありました、誰からみ教を聞いておられますかとたずねると、百万遍の中島勧誘僧正のみ教を頂いているといわれるので、その人の紹介で中島僧正におあいして、いろいろと法門についておたずねせられ、僧正はそれに対して一往お答えになり、機縁が熟しているとお考えになったのでしょうか、今、知恩院勢至堂に山崎弁栄上人が来ておられるから上人におあいなさいと紹介され

ました。すぐに居士は勢至堂に上人をお訪ねになりました。上人は居士に『一心にお念仏なさいませ、如来さまがお救い下さいます』と一言申されました。居士の両眼からはあふれるように涙が流れ出たのでありました。それから上人を大善知識と仰ぎ熱心な念仏者になられました。」と、私はそのお話聞いて

『親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひと（法然上人）のおおせをかふりて、信ずるほかに別の子細なきなり』との歎異抄の一節が思い合されて有難く感じました。人によってそれぞれちがうでしょうが、一文、一句、一語が私を救うて下さる、それゆえ法語（生きる言葉）と申すのでしょう、撰取不捨！ 有りがたいですね」

A「いろいろと尊いお話、有りがとう御座いました、私もそういう方に一度、お目にかかりたいものです」

B「ところがですね、私は九月十七日お話をし、翌日は町の未亡人会の集りにお話をして泊り、十九日早朝出発、その時老尼は玄関までお見送り下され『一期一会と聞いております、これが最後かと思われませう、どうぞ御大切に』と申されるので『ほんに一期一会、どちらが先にどうなるか分りませうが、共生極楽、共々にお念仏させて頂きます、どうぞ御大

切に』と念仏してお別れしましたが思えばこれが最後でした一ヶ月たった十月十七日、遷化なされましたとのこと。当日、他の寺へ御法要で参られ御本尊まさの前に焼香礼拝なされ『端坐合掌念仏申し、いつの間にかこときれていましたそうです。あまり長い間同じ姿勢で居られるので御施主がよばれてもすでに返事がなく命終して居られましたそうで、私共もかけつけましたけれど、どうすることもできず、自坊へお供をいたした様なことでした』と、現住昭栄法尼からお手紙を頂きました。

お互に、今日の集いも一期一会ですね。」

（浄土トラクト紹介）

大正大学教授・文博 竹中信常著

ものいう石

迷わぬところ・信仰のあり方・法然上人と念仏・名僧のことば・うまれいづるもの・花まつり・涼しさの世・成道について・釈尊の生涯・三つの危機・浄土への道・人生の深味・愚者は愚者にて申す

附 宗教関係放送目録

著者が十五年にわたって放送を通じて呼びかけて来た仏教思想・念仏信仰の精髓を集めた珠玉の名編。

新書版一五〇頁 価 一五〇円 送料 四〇円

カウンセリングとはなにか

今日仏教カウンセリングとか、カウンセリング仏教と云う言葉をよく聞きますが、いったいカウンセリングとは何のことでしょう。

一般にカウンセリングとは、相談、助言と云うことであります。すなわち、カウンセリングとはカウンセラー（相談者、助言者）とクライエント（患者）の目的をもった会話でありまして、悩む人がその態度や行動を改変するための援助をすることを目的とした直接的な接触の連続であります。故にこれは、忠告や討論ではなく、又、とり調べでもありません。これは、あくまで治療であります。カウンセリングは、カウンセラーとクライエントの一人対一人の関係であります。この一対一の面接を中心とするものであります。勿論集団カウンセリングと云う言葉がありますように、小さな集団を用いて行われることもありますが、一般に集団場面は個別的な場面より

複雑であり、またむずかしいものであります。その原理や技術は、個別的な場面より導き出されるものであります。それ故に一人対一人の個人的な関係がもっとも基本となるものであります。このカウンセリングのカウンセラーとクライエントの関係は、意図的に作られた関係でありまして、ある目的のために作られた一時的な関係であります。すなわち、目的が達成されるまでは継続されますが、いったんその目的が達成されたときには終結されます。永続的なものではありません。このカウンセリングは、面接場面を中心とするものですから、言語による手段会話を主要な媒介とします。勿論面接中の表情や態度等の非言語的手段もかなり重要なポイントになります。又、カウンセリングは心理療法的な要素をかなり多くもっておりますので、心理療法的カウンセリングになることが多い

のであります。そしてクライエントが自分の問題の解決や適応について助けを求めていますから、カウンセラーもまたそれに助けを与える助力的な努力をしなければなりません。このような関係にくるまでには、カウンセラーとクライエントの親近感（ラポート）をもつことは重要であります。カウンセリングは、クライエント自身が問題を解決するもので、カウンセラーはそれを助力する立場であります。なお、カウンセリングもは、クライエントが自由に何でも悩むことを訴えられる許容的な態度と、クライエントの悩みを表現した感情をただそのままなおに受容してやる態度とが必要であります。最後にこのカウンセリングする日時はあらかじめクライエントに知らせ、面接時間は、一回、三十分なり一時間として決められた面接時間は厳守することです。大正大学にカウンセリング研究所があり、土曜日曜以外の毎日午前九時より午後三時迄治療を行っております。心の悩をおもちの方はぜひお出掛け下さい。浄土誌同人の中村康隆先生が研究所長をなさっております。

（佐藤行信）

醜^{しゆう}太^{たい}子^し物^{もの}語^{がたり}

北村謙順

昔、ある国に、王子が生まれました。王様やお妃^{きさき}さまをはじめとして、国中が喜びにつつまれて祝うおめでたい事なのに、この王子のお誕生は、そうはまいりませんでした。生れ出た男の子の顔を見た王様は、思わず「ウーン」と、うなつたまま、何とも云いません。そして、「フーッ」とため息をはくのです。顔がなかったのですか。いえ、顔はあったのです。目も鼻も口も、ついているのです。それならいいではないですか。でも王様は、ため息をついているのです。目はなるほど二つついていましたが、丁度^{ちやうど}、出目金——とび出して、ギョロギョロ。鼻はありましたが、大きな団子が、顔のまん中に坐っている感じですね。ぼた餅^{もち}の方かもしれません。口は大きく裂^さけ上^さって、あごがどこ

にあるのか分らない。これが人間の顔でしようか　と思いたくなる顔付きだったのです。

でも、王様の子にかわりありません。捨て子も出来ませんから、仕方なしに育^{そだ}てられたのです。顔中がスッポリ入る帽子^{ぼうし}をかぶせて。眼が見えないと困るから穴を二つあけて。王様やお妃さまは、あるいは、病弱の子供であればいいと思っていたかもしれません。そうであれば、病気で死ぬ——その方が、この子のためにもよいと思ったのではないでしようか。

ところが、そうした時には、案外、病氣なんかどこにもないといった事になるものです。王子の体はすばらしい体格でした。体ばかりではありません。強い意志^{いし}、聰明^{めい}な頭

脳、やさしく豊かな情味の持主でした。かくして、顔の事が、かえすがえすも惜しまれながら、王子は青年時代を迎え、そしてお嫁さんを貰う年頃になったのです。王様と妃のなやみは、お嫁さんに、王子の顔をどうしようか、ということでした。その親の気持は分るような気がします。そうかといって、お嫁さんをもらわないわけにもいきません。そうこうしているうちに、お嫁さんが決ってしまったのです。近くの国の王様の娘で、月光と呼ばれるお姫さまでした。この姫が、又、絶世の美人なのです。皮肉なものです。醜い顔の男に美女が来るとは。世の中には、こうした事があるものです。怠け者の亭主に働き者の女房とかね。

とうとう月光姫のお興入れの日がまいりました。お城に着いた姫に、王様はこういいました。

「先ず、この国のきまり、を知らなければいけません。」と前置きをして、いくつか「おきて」を挙げました。実はそれはどうでもいいことでした。云いたかったのは、その後の言葉なのです。

「夫婦のおきてが一つある。それは明るいところでは、顔を見ることが許されないのじゃ。月光姫も、このおきてを間違いなく守りたい」

勿体ぶって王様は、いとも厳そかに申し渡したのです。この父王のわが子へのせめてもの思いやりから妙案として考へ出した手だても、月光に見破られそうになりました。姫は考えました。

「おかしいきまりだわ。だってそうでしょう。一生つれ添う人の顔を、一生お互に知らないなんて。そんな馬鹿なおきてがある筈がない。お城の中の空気も、何となく妙だ。そうだ、これは、なにかあるな。」

月光は思いきって王様に当って見ました。

「一度でよろしいのです。王子様のお顔に、会わせて下さい。」

「何じゃ、お前はもう忘れたのか。先日あの通り話して聞かせたではないか」

「仰せの通り覚えております。でも、どうしてこんな馬鹿なおきてが、この国にはあるのでしょうか」

王様は、もうバレてはいけませんから、大きな声で、おどすより外に手はありません。

「いや、ならぬことはならぬ」

「でも、一度だけ」

「ク ワーッ」

王様は立ち上ると部屋から出て行ってしまいました。そ

こで月光は、次の手を考えました。そして一人で背きました。

夜が来しました。広いお城も、静けさの中に眠る夜更けです。姫は何を考えたのでしょうか。起き上りました。枕元にある美事な燭台^{しよくだい}。月光姫の美しい手が燭台の方にのびました。

チッチッと火をつける音がして明りがともりました。燭台の把手^{とって}をとると王子の枕元を照しました。闇の中に浮き上る王子様の顔——恋い焦れた王子様の——一度だけでよいとさえ思った王子の——姫は思はず「アッ」といって燭台をガチャンと取り落すところでした。——ゾーッとするばかりのお化けの顔——そうです人間というより化物の顔です。姫の目から涙がポタポタと流れおちました。

「私はだまされたのよ。私が馬鹿だったのよ。何も知らずに来るなんて。それにしても、王様の憎らしさ。ずるさ。誰もおしえてくれない口惜しさ。」

気狂いのようになった姫は、オイオイと泣きながら、あてどもなく夜の道を歩きまわりました。

分りますね。

やがて自分の国に帰った姫に、次の災難^{さいなん}が待っていました。姫が国に帰ったのを知った国々から、お嫁の申込みが

来しました。中には腕ずくの申入れもありました。

「姫が自分の国に来なければ、攻め滅すから覚悟^{かくご}をしろ」というのです。おどしもこうなると大変です。姫はもう心の痛手^{いたで}から、お嫁さんになるのは、こりごりだと思っていきましたから、どんな国の求めにも応じる気は、出て来ません。ついに隣の大国が、攻め込む宣言^{せんげん}を出しました。月光の国は大変なことになりました。

これを聞いた王子は、馬にのると、一むち当て、月光のいる国を目ざして、まっしぐらに馳けて行つたのです。

王子は、月光に悲しい思いをかけなければならなかったことを済まないと考えていましたし、二度と月光を自分の妻に、などとは、フツツと思いついていましたけれども、せめてものつぐないのためにも、愛する者のために、最後まで出来得^ううことをしてやりたい。幸^{さいわい}を守ってやりたいと思いました。そこで、この姫の危急^{ききゆう}を聞いたのです。王子は、月光の国に入りました。国中は右往左往^{おうさおう}です。王子は料理人^{りようりにん}になることにしました。王子は文武両道の達人^{だつじん}ですから、何でもうまいものです。首尾よくお城の料理番^{ばん}になりすました。出来るだけ、姫の近くにいたことが、姫を守るために大切な事ですからね。

隣国の大軍^{りんごく}の前には、この国の軍勢は一たまりもありません。

せん。お城の町に攻め込んだ敵兵は、平気で何の罪もない人々の家に火をつけました。蒙々とあがる黒煙天も焦げんばかりの火焰の海は、この世の事と思われず、まさしく焦熱地獄の有様でした。

姫は、この様子を、悲しみにみちた眼で眺めていました。自分をめぐる様々の姿は、すべてはかないものでありました。自分が今することは何だろうかと思へてみましたものの。姫には、逃げる元気も、もとより醜太子のところへ行くことも、どうすることも出来ませんでした。とするど、死、そうです死ぬより外にありません。やがて燃え落ちるであろうこの城と共に火焰に包まれて死ぬこと。思い決した姫は、着物を正し、坐り直して用意をしました。火煙は城を包み、姫の居間にも立ちこめて来ました。その中に端座して眼を閉じた姫の美しい顔に涙が光っていました。思えばこうなったのも尋ねてみれば、私からだ。顔は醜くとも、心の美しい王子を、何故、私は捨てたのだらうか。形にとらわれて、真実を見捨てた女の浅ましさ。王子の顔の醜くさを笑った、おのれの心の醜さ……………

「王子様、お許し下さい、王子様！」

煙の中にワッと泣き伏した時、はげしい足音がして、黒い人影が浮き出た。煙を破って、姫の体を抱えおこした。

「姫！ 月光姫！」たくましい力強い声でした。

「アッ 王子様醜!!」

醜太子でした。月光姫か抱いて立ち上った王子は、城外に向って叫んだ。

「私は、醜太子である。民に先立つ者よ、よく聞け。おん身等は智と愛とを持てるか。怒りと欲をもって他をおかす者は、禍いついに自らに來ることを悟るがよい。仏の教に聞け。争いをやめて敬と愛とに生きよ。然らば、天下自ら和し民安らかならん。」

威風堂々たる王子の勇姿は、まさに仁王様のようにでありました。王子の顔は美しく輝き、もはや醜さはどこにもありませんでした。月光姫は、末永く王子に仕え、貞節のまことをつくしたといひます。(六度集經第八)

業界一の銅瓦・銅板葺一般・模様葺・別製
金具一式私の先祖の宮及び寺、六角堂、納骨堂及び鐘樓の銅材一式手間代も寄進、神様仏様へ報恩の奉仕故安く良く、他所には出来ない何代も研究せる卓越せる技術故負請業者も悔なき様御相談設計無料。

東京都文京区春日1丁目9の28

銅瓦職協
相談役顧問
設計及監督
電話

石黒工業

(812) 1551

独断のいましめ

宝田正道

(中央公論社編集・宣伝技術部長)

夫れ事は独り断ず可からず。必ず衆と与に論ずべし(下略)

——聖徳太子『十七条憲法』第十七条

年の瀬から新年にかけて、諸物価の値上げ発表が次々に行われ、庶民の心を不安に脅えさせている。殊に、米価をはじめ、水道、郵便、国私鉄、電信電話等、いわゆる公共消費物価の値上げ案は、たとえ、学識経験者その他各界代表の審議を経たり、一般の公聴会を開いた結果の止むを得ない処置とはいえ、国民全般の給与水準や経済生活を無視した、一方的な政治の貧困さの現われと見ることもできて、不愉快千万である。中でもひどいのは、先般の新聞代値上げである。これなど、読者を無視するものはなだしい抜打的な高額改定ともいうべきやり方で、独断とい

か、卑劣というか、全くお話にならない。無冠の帝王とか社会の木鐸とか、偉そうな口をきくわりに購読者をバカにした新聞社の大失態といっても過言ではあるまい。昨年は不況のあおりで倒産した中小企業も少くなかった

が、年の瀬のボーナス闘争で無理をして、さらにその苦を深くする会社も今年が多いことだろう。

聖徳太子は、今から千三百年も前に、ちゃんと「独断」の害をさとって、特に民を治める政治官僚を対象としたこの厳しい条項を、憲法に取入れられたのであるが、五千円札にしろ一万円札にしろ、その「聖徳太子」の値打ちが物価高で下る一方なのも皮肉な話である。

ともあれ、何ごとを行うにも、独りで事を決めてしまうのはよくない。単に政治や新聞だけの問題ではなく、われわれ人間の身边には、とかく独断の誘惑が多い。人間は神や仏でないから失敗もしがちであるが、その原因をたぐってゆくと、多くは自分一人の浅はかな独りぎめから、とりかえしのつかぬ失態を演ずる場合がしばしばである。

例えば、私どものように書物や雑誌を編集する仕事に携っている者は、よく校正の間違いをおかすことがある。「校正おそるべし」という言葉は「後生畏るべし」という孔子の『論語』(子罕篇)の格言、つまり、学問をす

る青年の将来性に目を向けて、年若い者の伸びる勢いはおそろべきものだ、という意味でいった言葉から字音をもじって、編集者間の合言葉みたいに使われる習慣になつてゐるが、校正という仕事は、それほど慎重に厳密を期して行われなければならないのである。

それを、ついいい加減（でなくとも、単独でやつて）一字や二字見間違えると、結果は多くの読者を誤らせ、その本の權威をおとすのみならず、はてはその出版社の社格や信用まで傷つけることになるのである。だから、校正は一人の眼より二人三人の眼を通してやらないとこわい。つくづく人間の眼や知識が、一人ではいかに頼りないかを知らされる仕事、それが校正というものである。

編集という仕事でも、編集長なら万事独断でやれそんな気がするが、やはり必ず会議を開いて衆議にかけないとダメな場合が多い。アランのいつてゐるように、「人は自分の持つていないものは悪く判断するものである」（幸福論）から、やはり衆智を集めて検討に検討を重ねることを怠つては、偏つたり歪んだりしたものが出来上るのである。

人生を歩くにも、独断やひとりよがりや警戒すべきことはいふまでもない。権力や金力で独断が貫けると思つたら大間違いである。まして若い血気にはやつて、親や師や友人の忠告に耳もかさず、己れの独断ですぎ勝手なことをしたら、世間という大きい隣人がこれを許すまい。結果が惨めな敗北に終ることは火を見るよりも燎らかである。

明治天皇は、五カ条の御誓文で、「広く會議ヲ起シ万機公論ニ決スベシ」といわれたがこの民意尊重の精神こそ、今日にも通じる民主主義の根本原則である。日韓問題で政府が強行議決にふみきつたことも、果してこの原則にそつたかどうか、大いに反省すべき点があるように思われる。聖徳太子も、「衆と共に相辨ずれば、ことばをわかれ辞則ことばなりち理ことわりを得ん」といつて、この十七条憲法を結んでいられるが、どんな難しい議題でも、互いに誠意と時間をかけてみんなで話しあえば、最後には必ず道理にかなつた裁断の道が開かれるはずである。

昨年は、国際的にも国内的にも、いろいろと物騒な紛争がもち上り、各地でいまだに解決点に達しない問題が今年まで持ちこされて

いる。まことに憂うべく悲しむべき世相である。世界の為政者はもとより、われわれ個人々々も、もう一度ゆっくり胸に手をあてて、独断を禁じ、衆とともに話しあう機会をもつよう、心がけたいものである。一人の人間、或いは一国の実力者の独断が、往々にして家庭を、国家を危機に陥れていることが、あまりにも多いからである。ちなみに聖徳太子は、憲法の他の条文でも「上和やわらぎ下睦なごみびて、事を論ずるに諧かなへば、則ち事理ことわり自おのづから通ず、何事か成らざらむ」（第一条）「我独り得たりと雖も、衆に従ひて同じく挙おこへ」（第十条）などと、しきりに独断をやめて衆と和することの必要性を説かれてゐる。要するに「和を以て貴しと為す」第一条の「和」の精神は、仏教的にいえば法華開会、諸法実相、僧伽和合等の思想体系を一体として、独断を排せば平和の生ずるという理念を示唆されたものと考えらるべきであらう。茶道でいう和敬清寂も、お互がお互の心の中に入つてゆく関係から、その永続のためには敬が必要となり、そこに初めて真の和の成立があることをいつたものである。今年こそ和の年にしようではないか。

誕生寺



本堂

岡山から津山線で一時間程行くと、左手に七堂伽藍のととのった大きな寺の構えが目につく。これが誕生寺である。この小駅の名前も、また誕生寺である。

田んぼ道を通って、駅から十五分ほど行くと、誕生寺の山門が、つきあたりに大きく立ちはだかっている。周りは、美しい土塀で囲まれて、いかにもきちんとしたただずまいである。少くも、宗祖法然上人誕生の地を求めてきた人であれば、誰しもこの門前にきたとき、肅然とえりを正さずには、いられぬ感激を味わうに違いない。

元禄八年に再建されたという本堂は、小柄ではあるが、重層のきれいな建物である。勢至丸様の誕生にふさわしい立たずまいである。稚児さんが、風に袖をなびかせているような、優雅さがみちみちている。この堂には上人御自作といわれる木像が安置されているのであるが、かすかにほほえんでおられるような、崇高なものである。

さすがにここは、上人御誕生の地とあって、いろいろと、心を動かされるものがある。御誕生の折に、白い二流れの幡が、降りてき

て、枝にひっかかったという二股の棕の木も本堂の裏手にあった。そして、更にその裏手の方に、産湯をつかわれたという、井戸まであった。法然上人廿五霊場の第一番目にあたるわけである。

「片目魚というのがいて、この裏の川にいます。この川を、片目川といいます」

説明してくれた漆間坤爾師は、そういつて宝物殿の中のガラス瓶にいる片目魚を見せてくれた。なんでも、上人の父が、夜討ちにあったとき、まだ子供であった上人が、すき間から小弓で、敵將の源内武者定明めがけて矢をはなったところ、その目にあたった。定明が、その目を、この川で洗った為、魚が皆片目になったという事である。小弓稚児と、上人がいわれるのも、そんなわけからである。片目川の橋を渡って、本堂の裏に出ると、勢至堂がある。この堂は、上人の御両親をまつたお堂である。

かたみとて はかなきおやの とどめてし

この別れさえ またいかにせん

母君のなげきを最後に観山に登られた上人は、やがて、末世凡夫のために念仏の法門を



勢 至 堂

開かれるのであるが、母君は、父の後を追うように、別れて間もなく他界された。上人は人の子としては、まことに不幸で、淋しい人なのである。そんな上人に、余りわれわれは、淋しさの影を見ないのであるが、これも上人の高徳のために違いない。

ここでは、毎年四月十九日に盛大な法要が行なわれ、近在の善男善女で広い境内がうまる。法要名は、「法然上人ご両親追恩二十五菩薩童迎接練供養」といわれる長いものであるが、元祿十二年から行なわれている有名な法要で、岡山県の保護文化財になっている。門前に娑婆堂というのがあり、そこから二十五菩薩のお面をかぶった練供養が行なわれるわけである。その衣裳も美しくし、いかにも上人誕生の地としての催しものにふさわしいものである。

宝物殿には、数々の宝物が所狭しと置いてある。これも、近い内に鉄筋の建物にして、永く靈跡を記念するのだと、住職の漆間正徳師は、語っておられた。とくに、上人の御両親の肖像画などは、この寺ならではの見ることでできないもので、今更の様に、こうした遺品を見るにつけ、上人との親近感を、味はうものがある。父君は四十三才、母君は三十七才という若さで、亡くなっている。

この寺は、上人が、両親追善の為に建立をと念願して、自からの像をきざんで、時の来るのを待っておられた。たまたま、熊谷入道直実が、上人の門に入ってきて、上人の意のあるところを知り、

「是非、私に上人の意のあるところを、させてほしい」



二 股 の 樟

と申し出て来たので、上人自作の像を持たせ上人生誕の地に一寺を建立せしめたことに始まるとされている。建久四年(一一九三)が、その建立の年とされている。

爾来、八百余年、吉水の法燈の流れとともに、今日に至っている。何分にも岡山の奥まったところとて、それ程に、賑やかな参詣はないが、心ある人が、いつといわず、この靈跡をたずね、上人の徳をしのんでいる。寺では宿泊設備もして、そうした人々の便宜を計っている。

(安居香山)

一月のことを正月ともいうが、正月といひ新春といつても、その呼び名はどうあろうと、この月は人間の生活に一つの大きな区切りをつける時期である。清らかなすがすがしい気持ちで、あらたまの年を迎える。誰しも此

みよこの土浄

一月正

雄俊橋大

の一年を無事に幸福にすごしたいと願ひ、めでたき世のもたらされる良い年であるようにのぞむのは人の常であるが、その願いと心情があればこそ、心静かに幸多かれと祈り、一年の計を立ててみようとする。

浄土真宗（門徒

宗）の寺院や信仰のあつた門徒の家では、門松は立てないけれども、その他の家ではどこでも戸ごとに門松をたて、戸口に注連縄と裏白・ゆづり葉、それに橙が飾られる。注連縄は神のまします清浄な地域であることをしめ

すための標示で、裏白は潔白を示している。

裏白と呼ばれるのは「しだ」のことで、しだの枝がたれさがっているさまは、寿命をたち子孫の繁栄するようという意味をもっているのである。ゆづり葉は新葉がでて古葉をおとすから、親子代々ゆづつて子孫がたえることなく、長くつづくようという願いをこめて用いるのであり、そのような意味では、橙も代々に通じさせて子孫代々相いつたえるようにということを用いるようになったのであろう。

元朝や仏に謝する衆生恩

雨圃子

門松や死出の山路の一里塚

来山

門松も立てずに門徒物知らず

月斗

正月は元日からじまつて、七草・左義長・成人の日と行事はつづき、初観音・初地藏・初大師と宗教的な行事も多い。そして二十五日は、比叡山をおりられ、念仏のみで往生できることを説かれて浄土宗を開かれた法然上人の忌日である。上人が流刑をゆるされ、仮の宿願津の勝尾寺から五年ぶりに入洛したのは建暦元年（一二二一）のことであつた。こ

こ三四年というもの、耳も遠く目もかすみ急にふけられたかにみえたが、翌二年正月二日から病床にふされた。十一月二十日都にかえつて来られたのであつたから、未だ四十日ばかりしかたつていないのに、病床の身となるとは。流刑のお疲れが急に出たのであろうか、都に帰ることができたという安心感があつたからかも知れない。食欲もなく、目にみえて衰弱がいちじるしかった。そして二十三日源智の請によつて一枚起請文を書かれたが、その日暮れ頃から高声念仏もご苦勞のようにはやられ、ついに二十五日浄土に旅立たれたのである。以来二十五日は法然上人忌として法会が修せられてきたが、今では底びえのする寒い日にやるよりも、暖くなつてから修すれば参詣の人たちもさぞかしよいのではないかということ、春うららかな四月につとめられるようになった。

法然上人が浄土宗の基礎をきずいたとすれば、寓宗とか附庸宗といわれ、天台宗の附屬の一宗としか思われていなかった浄土宗を一本立ちさせるために、献身的な努力をされたのは聖岡上人であつたろう。彼は暦応四年

(一三四一)の正月二十五日、常陸岩瀬の城主白石義光の子として生れた。恰かもその日は法然の百三十回の忌辰にあたっていた。八才のとき瓜連常福寺の了実の門に投じて出家し、更に蓮勝の室に入ったのは十五才の時であつたが、以来蓮勝に師事して宗義の秘奥をきわめ、ここに居ること五年、業成りて

のち相州桑原道場に定義をたづねて、法

然上人から次第相承されてきた宗脈と戒脈を相承したという。その後またゆまず

学者をたづねては、真言・禪をはじめ、

俱舍・唯識を学び、更には神道・和歌に

についても研鑽にこれつとめ、応永二十七

年(一四二〇)八十才で寂するまで著述

と講述にいとまなく、戦乱のさ中であつ

ては洞窟(直牒洞)にのがれ、僅かな光

りをたよりに、傍らに文献をおくことせ

ずに、決疑鈔直牒十巻をあらわした。そのほ

か彼は百数十巻にもものほる著述をのこされて

いるが、このように多数の著書をものこされ

た彼の目的は、当時浄土宗が天台宗の寓宗と

みなされてきたことに意気どうりを感じ、ま

さしく浄土宗は独立宗派であることの面目を

發揮しようとされたのである。また彼は諸所に談林を設けて、自から講義し、学徒の教養につとめた。これが後の十八檀林がつくられる基礎となつたのであるが、宗侶たらんものは必らず宗学をまなばなければならぬ、更に伝法もうけるようにしたいと考え、伝宗伝戒



の規則も定めた。このようにして宗門を思う彼の心のなかには、百年の大計がひそんでいた。

聖岡のほかにも、近世浄土宗のいしずえをきずいた人は多い。徳川実康の命をうけて九州におもむき、切支丹を折伏し、その首魁伴

夢を浄土宗に帰せしめた幡随意、琉球にわたり時の国王尚寧王を教化し、桂林寺を建てた袋中良定も逸することはできない。幡随意は元和元年正月五日七十四才で寂し、袋中は寛永十六年正月二十一日八十八でなくなつてゐるが、両師ともに各地に法錫をふるい、多くの門弟を教養し、数多の寺院を建立されてゐる。

上人法然院奥麻当

月末の頃ともなれば、ちらほらと梅の花もほころびはじめ。青い草などめつたに見えず、木の芽もかたくとざしてゐるのに、梅の花ばかり、ひとり咲いてゐるのを見ると、春の訪づれをはっきりと感ずるようになる。大伴家持は天平二年正月十三日梅花の宴をもよほし、時に宴にはべつた柿本人麻呂は「梅の花開ける岡辺に家居せば、又山高み零り来る雪を」と読んでゐる。梅が開いたとて寒い日もある。しかし「梅一輪づつの暖かさ」、梅の春のおとづれをささやくのも間近い。

春もやや景色ととのう月と梅 芭蕉
下駄かりてうら山道を梅見哉 蕪村
梅咲くや乞食の家ものぞかるる 其角

風邪に弱かった法然上人

元 成 木 鈴

法然上人の像や肖像画をみると、デブブリと肥って大らかな感じを与え、一見丈夫そうにみえる。そこで従来から大部分のものが勝れた健康状態であったように記している。それは『一切経』を五度まで読み返したというファイトや、八十歳まで生きたという事実とが信仰面と結びついて作りあげられたものである。だから私は法然上人が大柄であったとか、豊満な肉体の持主だとか、八十歳まで生きたから健康であったと簡単に決めることは疑問だと思う。いくら健康な人でもポックリ逝く場合があるし、病身の人がかえって長命な例がかなり多い。健康な人はどうしても無理をするし、病身の人は注意をするからでもあろう。

それはともかく、私は、法然上人は見かけよりは弱い体質で、どちらかといえば腺病質な人ではなかったかと思う。数多くある法然上人の伝記の中で、法然上人を病気がちであったといっているものは全くない。しかし僅かの記事ではあるが、語録に表われた面から判断すると病弱であったといって過言ではないであろう。法然上人は、「道心のないこと

と病の二つが自分の歎きである」と『要義問答』の中でのべている。経済的には何の不自由もなかったろうと想像される法然上人ではあるが、病気にはかなりの神経を使っていたことが推察される。法然上人の病気には風邪・瘧病・老衰などがあげられるが、灸をすえたことも語録に散見されるし、健康には特に留意していた様子がうかがえる。

建久九年(二六)と思われるが、四月二十六日付で法然上人が津戸三郎に出した手紙によると、法然上人はよく風邪をひいた。この年も昨年の暮ごろからひいた風邪がぬけきらなかったらしい。しかし何時もの風邪と思つて気にもかけず、五十日間にあたる恒例の別時念仏をつとめた。ところが風邪がこちれて一層ひどくなり大病になってしまった。二月十日ごろから高熱が出て口が渇くようになったが、後十日間だと頑張つて無事つとめぬいた。しかしその無理がたたつて病気はさらに悪化し、そこへ水などを飲んだのでよりひどくなり、今もって体の節々が痛んでいる。このように長びいてはいるけれどもこれ以上悪化することはないだろう。医者が大事にしな

ければならないというので二回ほど灸をおこない、湿布などもしてみた。また日本の薬はいうまでもなく、いろいろな三十の薬（輸入薬）も飲んでみた。そのため今はだんだんよくなってきたようである、といっている。これによって四月になっても苦しんでいた様子がわかる。現在なら肺炎じみた病状であろうか。

それにしても、どんな薬を飲んだのかわからないが、灸をしたり、湿布をしたりしたことは注目される。今でも扁桃腺などをやるとよく湿布をする。しかし風邪のときに灸はするものでないといわれる。どうしてだか私に



法然上人肖像(知恩院)

はわからない。法然上人が灸療法を行ったのは風邪そのものではなく、熱に浮かされ体の節々が痛んだための療法であつたらうか。現代医学で風邪に悪いというならば、これはかえって逆効果になったことであらう。

毎年寒くなると風邪が流行する。そろそろ今年もインフルエンザで集団欠席が多くなる季節である。鼻がつまり、咳が出て頭がいたむ。その上熱のため体がぞくぞくする。全く不愉快である。軽重は別として大抵の人は年に一、二回ひくであらう。私も早々と風邪をひき一ヵ月ほどぐずぐずしてしまった。一体に年々しつこくなつてゆくようであるが、今年の風邪はとくになおりにくい。この憂うつさは何ともいえない。

日ごろ新聞やテレビなどの広告で、「ゴホン」といったら竜角散」「クシャミ一つにルル一錠」「風邪ならダン」など、いやなほどきかされるわれわれではあるが、そして、いくら商売でもしつこすぎるなどといって腹だたしくなるときさえあるが、ひいてしまうとやはり早目に飲めばよかったと後悔する。事実ひいてしまった後では効果は薄く、少しぐら

い飲んだのではなおらない。そして広告をうらみさえするのであるが、よく考えてみるとこれらの広告は「風邪ならダン」とはあつても「よく効く」とはどこにもいってない。それを効くと勝手にのみこんで使用する人間様ほど可愛いものはない。近頃問題になつてゐる土地周旋屋さんの誇大広告と同じで逃げ道はちゃんとできている。

風邪などと思つて馬鹿にする。そしてとりかえしのつかないことになる。それが人間の常であらう。法然上人ではないが、いつもの風邪と思つて馬鹿にするととんでもないことになる。聞くところによると風邪の原因は疲労が第一だという。なるほど風邪のときはビタミン剤を共用するとなおりが早いのはそのためであらう。ともかく厄介な病気である風邪が、法然上人の場合は結果的にみて大きなプラスになった。この風邪のおかげで檀越や弟子達の不安がつり『選択本願念仏集』の完成にまでなつていったのであるが、われわれはつらい思いをし、その上銭を失なうのがオチである。凡人と聖人の差はこんなところにも見られるのである。

（お経の話） その一

一日 常勤行式

衆生と共に進む

村 瀬 秀 雄

お経を読む目的

仏さまの前でお経をあげることを読経ともいい読誦ともいいますが、それにはそれだけの理由と目的があります。読経の目的からみた場合にそれが祈願のためであるか、廻向のためであるかの二つに分けることができます。

伝教大師は饒護国家のために比叡山をお開きになったし、日蓮上人は立正安国をとなえて外敵折伏を祈られました。これらは国家のためにその安たいを祈願したものです。また早ばつに際しては雨乞いの祈禱が行われ、天

変地異が起るとこれをやわらげるための祈禱が行われました。これは自然界の現象のためであります。次には対人関係のものがあつて例えば開運や商売繁昌や病氣平癒のための祈願があります。特に伝染病が流行り始めたり有力者が重病になったりすると、広く一世いに祈禱が行われました。

ところが浄土宗では祈願をしません。浄土宗の読経は、あくまで極楽往生の行として行われるか、またはその功德をふり向けて故人の追善のために廻向するかの場合に行われます。このことについて法然上人が祈願を断つ

たという話が勅修御伝にのっています。

無品親王静恵という人が重い病氣になり、一方では医術をつくして治療するとともに、他方では高僧知識に大般若経を転読してもらつて病氣平癒の祈願を続けました。しかし親王の病勢はますます悪化し、いよいよ後数日の余命と思われました。親王は祈禱の高僧知識をさしおいて、特に法然上人を招請したいと思ひ、使者を向けました。しかし上人は祈禱を行う意志がないので、使者がきても二度まで断りました。そこで三回目の使者として実昌律師がきて、祈禱ではなくお念仏の話を聞きたがつている旨を伝えて懇請したので、ようよう上人は親王の許に赴きました。その結果について次の通り記されています。

「親王御対面ありて、いかゞしてこのたび生死をはなれ侍るべき。後生たすけ給へと仰られければ、上人臨終の行儀を談じ申され、弥陀本願のおもむきるのべ給ふに、親王感涙しきりにくだりたまひ、帰敬のたなこころをぞ合せられける。上人はやがてかへり給にければ、次の日御往生ありけるに、最後に念仏一万五千遍申させ給て、念仏とともに、御息と

どまり給にけり。諸人随喜の掌を合せ、上人の徳をぞほめ申ける」

このように法然上人が祈禱することを拒否したわけは、祈禱によって病氣平癒することはないと信じていたからです。もし祈願して病氣が治るなら、一人の病人、一人の死者もない筈でないかと論難されました。

「宿業かぎりありて、うくべからんやまひは、いかなる議々のほとけ神にいのるとも、それによるまじき事也。祈るによりて病もやみ、いのちのぶる事あらば、たれかは一人として病みしぬる人あらん」

このご法語は祈禱の盛んな時代にあつて、実に強いお言葉であつたといえましょう。

読誦大乘の意味

次に読誦する理由は、読誦すれば大きな功德があるし、經典が読誦をすすめているからであります。大經下卷に次の一節があります。

「たとい大火の三千大千世界に充滿することあるとも、かならず當にこれを過ぎて、この經法を聞き、歡喜信樂し、受持し、読誦し、説の如く修行すべし」

例えどんな困難があつても、大經を読誦しなければならぬ。読誦することによって眞實の道理がわかる。そしてその教えに従つて實踐しなくてはならぬ。このように經典がすすめています。

また觀經に読誦大乘という句があつて、この句を善導大師は次のように説明しました。

「読誦大乘というのは、この經典をしばしば読み、しばしば尋ねれば、それによって智慧が開発されるという意味である」

つまり眞實の智慧を開発するために、回数多く觀經を読むべきであるということです。

浄土宗では五種類の正行をあげて、その実行をすすめています。その第一は読誦正行です。ただしこの場合の読誦は大經觀經小經の三部經を読むことであつて、その他の經典を読むことは正行ではありません。また五つの正行の中でお念仏を称えることが中心となつていて、その他の四つの正行はお念仏を称えるための助けという意味での正行であります。それはそれとして、浄土宗で読誦するということは、それによって眞實な道理を諒解するということです。諒解できて初めて修行

もでき智慧の開発もできるわけです。逆にいうならば訳がわからずに読誦しても、それは浄土宗の読誦にならぬということです。

訳がわからずに読んでよいのは陀羅尼であります。陀羅尼は梵語のままの音を今に伝えているので意味のわからぬことも無理でありません。陀羅尼を呪して祈禱するのは、陀羅尼に神呪力があり、經文自体の力によって悪が退散すると信じられているので、唱える人がその意味を諒解していなくてもよいのであります。

日常勤行式の特徴

日常勤行式の重点は読誦しお念仏を称えるところにあります。このように一見したところ読誦と念仏と中心が二つあつて、二本だてのように思われますが、実は読誦はお念仏を称えるための助けである以上、經典読誦は従であつて、中心はあくまで念仏一会であります。もし毎朝のおつとめに際して、時間の余裕がなかった場合には、たとえ読誦に短い經文を選んだとしても、念仏一会は時間の許す限り長く、少しでも数多くお念仏を称えることにします。いよいよ時間がなかったなら

ば、読経を略してでも念仏一会には時間をかけたいものであります。

日常勤行式の内容は、阿弥陀さまへの讃嘆とお念仏であります。そしてその特色は「すべて衆生とともに進む」という精神であります。功德を自分だけのものとせず、多くの人々に分けあうということでもあります。

三尊礼の各節に「願わくは諸々の衆生と共に安楽国に往生せん」の句がつづいていますが、このことは六時礼讃を通じてのことですが、自分独りが極楽にゆくだけで満足せずに、衆生と一諸にゆく、衆生を連れてゆくという願いであって、大切なことであります。

総回向偈には「願わくはこの功德を以て、平等に一切に施し、同じく菩提心をおこして、安楽国に往生せん」とあります。この偈は読経も終り、お念仏を称え終つてから、この善根功德を自分独りのためばかりでなく、平等に他の一切衆生に及ぼしたい、上は覺りの仏智を求め、下は衆生を教化しようという心を互にもち合つて共々極楽往生しようと願うのであります。崇高な精神であります。

また四弘誓願には「自他法界は利益を同う

し、共に極楽に生じて、仏道を成ぜん」とあります。自分も他人も全世界のものが平等に仏の利益に預るように、共々浄土に到つて、仏の能力を得て社会浄化に努めたいということです。法然上人のご法語に

「上品をねがう事は、わが身のためにはあらず。かのくににむまれをはりて、かへりてとく衆生を化せんがためなり。これあにほとけの御こころにかなはざらんや」

とあるのも、同じ精神であります。最後

の送仏偈には「同生相勧む。尽く来るべし」とあります。この世に生を同じくする君たちは、一緒にお互に相勧め合つて、だれもかれも浄土の行に参加しようではないか、というものです。勤行式の最後の句として、いかにも相應しい感激をおぼえる言葉であります。この烈しい意気を感じて口を閉じると次には自然とお念仏が口について出てきます。日常勤行式は形式がよく整い、一見おだやかに順を追つて読誦できます。ところが静かに見える中に、旺んな意気と大きな慈悲とが藏されていて、あくまで衆生とともに道を進んでゆく精神が脈々として流れているのであります。

浄土トラクト紹介

村瀬秀雄編

浄土宗檀信のおつとめ

檀信徒のための日常勤行式に解説、訓読を行ない、真意が会得できる様にし、又檀信徒として心得るべき点を略述し、日常生活のよりどころとなるやさしいお経。

価 九〇円 送料 二〇円

安居香山著

(大正大学助教授)

四季の寺まいり

—浄土宗寺院の年中行事—

修正会・御忌会・涅槃会・鏡西忌・善導忌・彼岸会・宗祖降誕会・花まつり・記主忌・お盆・お十夜・成道会の由来、意味を簡明にあらわし、加えて弥陀信仰への導びきとなる好著、写真多数入り。

新書版二〇頁 価 二五円 送料 一〇

支部便り

ベトナム救援

全日仏長野大会に於て決議されましたベトナム同胞救援の運動を、長野仏教会としても取り上げて、いま募金と署名運動がはじめられました。集められた金品は、現在駒沢大学に留学中の釈マングラニを通じてベトナム同胞の医療その他に当てていただく手はずになっています。

全日仏大会に決議されたことも、決議のしっ放しでいつも具休性を欠き、いざ実行となると、その何分の一もできない現状の中で、このような問題はなかなか難しく、特に南北ベトナムに分れ、それが思想的にも国際的にもすぐ危険なつながりをもつことですので、PRも徹底しにくく「さわらぬ神に祟りなし」となってしまうそうですが、なんとか盛り上げて、われわれ仏教徒として、現に戦禍に苦しんでいる人たちを看過するにしのびないと言うまごころを、仏教徒としての運動にしなければならぬと思うのです。

それにつけても、平和と云うことのむずかしさ、純粹と云うことのむずかしさ、他国のことに於てさえ純粹にものも云えない日本人のみじめさを痛感しています。

どうか全日仏の決議通り、日本中の仏教徒がこの運動に奮って参加して下さい、切にお願いいたします。

(長野 渋谷賢応)

新年賀謹

千葉市 大蔵寺

長谷川良信

静岡県富士宮市大宮

大頂寺 石井真峯

電話(富士宮)三四四五番
(市外局番)〇五四四二

長野市仏教会長

丸山宗隆

長野市茂菅 静松寺

總本山知恩院
大本山増上寺
善光寺大本願 布教師

小布施弘学

長野県松代町 長明寺

明治天皇明石行在所 光明寺

山口諦存

兵庫県明石市鍛冶屋町五六

水野愍随著(頒価七〇〇円送料共)

『寺院生活』刊行会

浜松市笠井町法永寺内
振替名古屋五四七八番

い集の賀祝念記

昭和十年、故真野正順先生を中心に設立された「法然上人鑽仰会」も本年にて三十周年の長きに至りました。これを記念すべく、去る十二月六日午後五時より、東京上野精養軒において講演会と祝賀会が盛大

に催されました。当日

外には不忍池越し、夕

焼けの中に富士の霊峯

を遠望対することがで

きました。

夕焼けの中

に、この様にくっきりと見えることは、

スモッグ等のため数年来なかったのと。また内には宗門関係の方々、学校関

係の方々、信仰あつき在家の方々、遠く

は静岡・茨城等からも御参会いただき、

いやが上にも崇高な中に催すことができました。早稲田大学教授福井康順博士の「法然上人鑽仰」と題する、記念講演は宗門外から見た上人のすばらしい御業績の中にはぐくまれた弥陀信仰の尊さ、また現在の浄土信仰のあり方等々、参会者に深い感銘を与えました。そして祝賀会が始まる頃には日も



福井博士の講演

とつぷりと暮れ、不忍池に写るネオンが、鑽仰会を今日まで育てて来た先師のあたたかいまなざしにも似た中で進められました。出席者各位からの祝辞は今後の会の運営に、全て参考となるあたたかいお言葉でした。阿川貫達先生は

三十周年の「三十」という数は弥陀四十八願中の第三十願、第三十一願に例えるならば未来永劫つぎることのない、めでたい数である。

と宗学の立場からの御祝辞。増上寺執事長里見達雄僧正、小石川伝通院住職大河内隆弘僧正は

創立当初の気持にかえって、先師の遺徳にはじめ様益々本会の興隆を望む。

とのはげましの御祝辞。宗務支所長新谷寛応僧正、宗議会議長稲岡覚順僧正は、

浄土

三十周年

現在沈滞気切の浄土信仰を打破する程でした。
く、宗門としても協力をおしまない。
との力強い御支援の御祝辞。また純粹に
読者としてのの在家
の方々は、

この様な会に出
席できた喜びの
中に、益々本会
の発展と共に、
心の寄りどころ
としての弥陀信
仰へ導びき下さ
い。

と、卒直なお言葉を
をいただきました。
た。その外創立当
初より今日に至る
までの思い出話
し、また鑽仰会に
対する注文、激励等々つきることなく話
しが続き、予定の時間を一時間近く過ぎ



祝賀会風景

この様に東京での三十周年記念の講演会・祝賀会に盛会裡
に意義ある集いを催すことができました。これを機会に、以
前にも増して機関紙「浄土」を中心として、
皆様の御支援、御理解をいただき、更に進ん
でいきたいと思ひます。当日の参会者は次の
方々です。

阿川貫達	阿川文正	秋元朝吉	石井真峯
稲岡覚順	稲田稔界	大河内隆弘	大橋俊雄
遠田弘俊	金子真甫	北川有光	栗本俊道
久米原達丈	小橋麟瑞	里見達雄	佐藤密雄
佐藤良智	佐藤行信	佐藤良純	佐藤成順
佐藤 闇	斎藤昭俊	新谷寛応	柴田敏夫
白幡憲佑	清水善瑞	霜田平蔵	杉田義俊
関 一三男	竹中信常	宝田正道	玉山玄重
高瀬堯文	田丸徳成	塚田弘導	築地泰順
寺尾弁瑞	戸松啓真	中村素堂	中田念竜
西村郁治	服部仙順	原とき子	福井康順
藤井亮彦	福島純江	松濤達文	真野竜海

宮林昭彦 望月百万 山本緑瑞 安居香山 吉井泰順 吉水孝雄

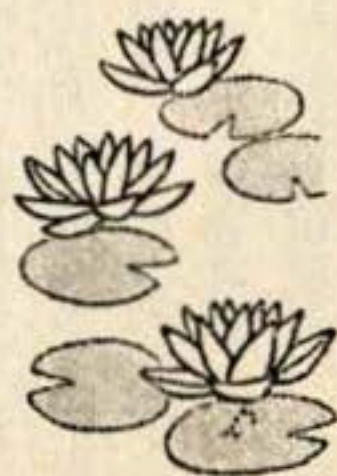
長谷川宣丈

(敬省略 五十音順)

みんなの法然さま

— ひじりの誕生 —

高 橋 良 和



わたしは備前の岡山育ち、米のなる木はまだ知らぬ。

という古いうたがある。ことばの意味はいろいろの解釈があるが、米は木にみのるのでないから、百姓のすることは知らない。すなわち、下々（しもじも）の生れでないということであるかもしれない。

とも角も岡山をあらわす古いうたの一つである。その岡山は備前、備後、備中それに美作（みまさか）とわかれていた頃があった。明治までつづいたのであるが、それが廃藩置県という明治維新になって、岡山県となるまではこの三つの国にわかれていたのである。備前、備中、備後はそれぞれの国からして、兵庫県に近いところから前、中、後となっているのであるが、それが取鳥県につづく奥まったところに美作の

国がある。何分一つの県が四つの国に分かれているのであるからその面積からいってもそう大きくない筈である。山また山の重なるところに広がるこの美作の国は、岡山県からいってもたしかに中央から離れたところであるが、それだけにいろいろな意味での歴史のあとが残されているのである。

その奥の津山が一ばん大きい町であるが、そこにゆくのは岡山から支線が一つ通じている。この支線を因美線（いんびせん）と称している。昔はトンネルのまことに古びたガタガタの軽便鉄道であったが、今はディゼルの準急「みささ」「砂丘」の二本の私電が通っているので、昔と今とはその便利さにおいて雲泥の差であるといえる。

この因美線の始発岡山から数えて十二番目誕生寺という駅



健造 印

がある。その駅の一つ手前には弓削（ゆげ）という駅があり、その次が誕生寺であるからわりあいにおぼえやすいのである。弓削という名は古い人たちのあたまにはまだ残っているが、奈良朝時代のあの弓削の道鏡いう坊さんにゆかりのあるところである。

さてそれはとも角としても、この次の誕生寺という駅は日本の国鉄の駅としては、あまり他に例をみない駅の名である。

誕生寺というから誰かが生れたというぐらゐの見当につくと思うが、さてその誕生の主人公は一体誰なのであろうか。

岡山というところは昔から宗教的な偉人を生んだところである。というのは、臨済（りんざい）禪を創めた栄西（えいさい）禪師もそうであるし、また黒住教の教祖黒住宗忠もこの岡山の生れである。

まだもう一人ある。それが法然上人である。もちろん年代的にみて法然上人が一ばん古いのであるから、その法然上人の宗教的な感化が大きくおよぼしたとみても、さしつかえな

い筈である。

そこでこの法然上人が生れたところというのがこの駅の誕生寺というところなのである。

それならこの本を手にしてくださる方は、そうか、法然上人の誕生地なのかと、わたくしが今まで書いた駅のことになづいていただけると思うのである。

話は一応史実に従ってつづるのが一ばん安定感があるといえるので、それは今から八百年前のことである。更にくわしくは今から八百三十三年前といえるのである。

このあたりを久米の南条稲岡の庄といったと、古い記録はつたえているが、今はこのような古い名など消えてしまつて、岡山県久米郡南町里方というのが正しい名前であるがその町にある寺を誕生寺と称するのである。

はっきりいうと、法然上人はここで誕生したのであるが、そのときのありさまを古い書物ではこうしるしている。

長承二年四月七日のこと、このあたりに住む漆（うるま）の時国の邸宅に白い幡が二流れとびきたって、棕の木のかずえにかかり、美しい鈴の音四方にひびき、いろとりどりの雲があでやかにかがやき、七日もすぎて天にのぼった。

この世界的な偉人の誕生を美しい筆であらわしている。いかにも日本の文学がこの偉大の誕生をたたえるのに筆舌につ

くせない表現をしているところに、上人の偉大さをあらわしているようであるといえる。

この奇瑞があるなかに誕生したのが法然上人である。然し生れながらにして法然上人とは申さなかつたので、幼少の頃の名を勢至丸（せいしまる）と称しているが、勢至とは智慧をあらわすことばであつて、勢至菩薩の智慧にあづかるということで、勢至菩薩の再来という期待もあつたと思う。とも角も神童ということばがあてはまるほどで、竹馬に乗つてあそぶ頃より、ときどき西に向つて手を合わせたという。大きくなつてから西方浄土にあこがれをもつきざしがこの頃からあつたらしく、いかにも上人の幼児をあらわす一つの出来ごとである。

玉のような男子の誕生でその母の秦氏（はたうじ）もそのあとつぎを得て、いよいよたのしい家庭のいとなみがつづけられようとしているときのことである。

世のなかには、よいことは長くつづかぬものである。どこに災が待ち伏せているかわからないのである。

それはこの勢至丸が九才の頃である。事件は一家を不安のどん底にたたきおとしたのであつた。

新年賀謹

杉田義俊

神奈川葉山町 相福寺・明照幼稚園

堀田良謙

静岡市日吉町二ノ二 華陽院

北出立法

三重県多気郡大台町 慶雲寺

原口徳正

東京新宿二丁目 正受院

法然上人鑽仰会

佐藤密雄 安居香山
佐藤良智 佐藤行信
中村康隆 水谷哲雄
村瀬秀雄 佐藤成順
竹中信常 長谷川宣丈
宮林昭彦

編集後記

▽新年に当り、読者各位の御多幸と御繁栄を祈念し奉ります。「浄土」も三十一年度、益々発展に努力いたしたく存じます。

▽新年号より誌面を一新しました。檀信徒の方々にも分りやすい内容を網羅しました。読者を拡充すべく、各位の御支援、御協力を以前にもましてお願いします
▽東京での創立三十周年祝賀会は誌面で報告の様に盛大に行なわれました。二月末には京都で開催いたしました準備中です。
▽各支部からの便りをお待ちしております。併せて、本誌への御意見、希望等お寄せ下さい。

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

(送料 六円)

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 正月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十年十二月二十五日 印刷

昭和四十一年一月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林昭彦

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区根田町一ノ二二

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

年 新 賀 謹

浄土宗宗議会議長

稻岡 覚 順

川口市北町二ノ五〇 西福寺

浄土宗宗議会議副議長

井原 文 雄

山口県柳井市柳井津 瑞相寺

浄土宗宗議会議員

赤平 昌 導

青森県弘前市新寺町 真昌寺

浄土宗宗議会議員

大崎 仏教会長

大谷 隆 雄

東京品川区上大崎一ノ七九四 常光寺

浄土宗宗議会議員

栗本 俊 道

東京文京区大塚上町 西信寺

浄土宗宗議会議員

白井 玄 祥

東京世田谷区玉川瀬田町 法徳寺

浄土宗宗議会議員

柴田 敏 夫

横浜市港北区菊名 蓮勝寺

浄土宗宗議会議員

白幡 憲 佑

横浜市南区庚台 光明寺

浄土宗宗議会議員

飯田 信 弘

三重山光運寺
四日市市中部三番
TEL(52)三〇四二番

浄土宗宗議会議員

真野 孝 信

京都府八幡町 正法寺

浄土宗宗議会議員

細井 照 道

高松市仏生山町 法然寺

浄土宗宗議会議員

丹羽 貫 誠

大分県佐賀関町 正念寺